

Sweet Magic

Airi

部屋の窓が一面ガラス張りなんて信じられない。
なんつー無防備な設定だ、信じられない、マジか、向かいのホテルから狙われたらどうすんだあ。まあ平気みてえだけど、なんだこれ普通のガラスじゃねえかあ！

部屋に入るなりそんなことを言い出す情人に、ザンザスは今日何度目になるのかわからない溜め息をついた。

そういう男だ、慣れている。つもり、だった。たぶん。そうだろう、と思う。

男は普段足音をたてないで歩くが、今はわざと音を立てて広い室内を歩く。室内履きが入り口に備え付けられているのもこの国の流儀らしい。靴は入り口の近くに脱ぐのだろう、洗面所やベッドサイドではなく。

「おおい、ボス、そこらじゅう勝手に歩き回るんじゃねえだろお：あー、そこ、近づくんじゃねえええ」

「馬鹿かオマエ」

「馬鹿ってなんだあ！」

「馬鹿を馬鹿と言って何が悪い」

スクアアロが止める間も与えず、ザンザスは続きの部屋を横切ってどんどん奥に入っていく。何かあつては大変だと慌ててついてゆくスクアアロの伸ばす指先にほんの僅か届か

ない距離で、ザンザスの動きが先へ進んでしまつて、珍しく素手の右手が虚しく宙を切った。

「あー、あー、なにすんだあ！」

「オマエもいい加減にしろ」

アジアには高層建築が多い。今はチャイナやアラブに抜かれているが、かつては東洋一の高層ビル群を誇ったジャパンのトウキョー、その街中に数多く林立するホテルの中では比較的、最近出来た建物は、南に海を、北に電波塔の三角を望める素晴らしいロケーションがウリの外資系だ。近くにもいくつか同じようなホテルがあるが、裸眼で中を見ることはとてもできないが出来そうにない距離である。まったく見えないということではないが、距離がありすぎて流石に、狙撃の危険があるとは考えにくい。この国は実際のところ、銃を手に入れるのは非常に難しい国の一つでもある。短銃ならともかく、遠距離を狙うライフルなど、持ち込むことすら難しいことを、この男が知らぬわけはあるまいと、窓近く、外界を見下ろせる位置に立ちながらザンザスは思う。ぎやあぎやあ言いながらスクアアロは近づいて、ザンザスと窓ガラスの間に体を割りこませようと手を伸ばした。

「ぎやつ！」